

編集にあたって 姜尚中

巻頭言 姜尚中

凡例

第1章

悩める市井の思想家——東学の創始者崔濟愚

井上和枝

はじめに

崔濟愚（一八二四～六四）

- 一、挫折と彷徨の時期
- 二、ハヌニムとの邂逅
- 三、東学の創始
- 四、東学の布徳と著述活動
- 五、崔濟愚の死と東学

007 003

第2章

朝鮮の独立と植民地化のはざままで

糟谷憲一
都冕會

はじめに

高宗（一八五二～一九一九）

高宗即位の歴史的背景／第一期／第二期／第三期／第四期／第五期／第六期

044 041

大院君（李昰応）（一八二〇～九八）

明成皇后閔氏（一八五一～九五）

神貞王后趙氏（一八〇八～九〇）

純宗（李坧）（一八七四～一九二六）

閔升鎬（一八三〇～七四）

閔台鎬（一八三四～八四）

閔泳翊（一八六〇～一九一四）

閔泳煥（一八六一～一九〇五）

閔泳駿（閔泳徽）（一八五二～一九三五）

083 081 080 077 076 074 072 071 069

朴珪寿	(二八〇七～七六)	085				
金弘集	(二八四二～九六)	087				
金允植	(二八三五～一九二二)	089				
魚允中	(二八四八～九六)	091				
朴泳孝	(二八六一～一九三九)	093				
朴定陽	(二八四一～一九〇五)	094				
安重根	(二八七九～一九一〇)	096				
その他の人物		100				
任百経	柳厚祚	趙秉昌	姜洌	韓啓源	閔奎鎬	閔謙鎬
閔心植	趙寧夏	金玉均	洪英植	沈舜沢	金炳始	金永寿
趙秉世	兪吉濬	趙秉式	沈相薫	朴斉純	李容翊	李完用

第3章

幕末を動かした政治思想

——尊王攘夷と公議輿論

前田 勉

はじめに	115
------	-----

渡辺崋山	(二七九三～一八四一)	120
生田万	(二八〇一～三七)	125
徳川斉昭	(二八〇〇～六〇)	131
佐久間象山	(二八一～六四)	135
吉田松陰	(二八三〇～五九)	139
横井小楠	(二八〇九～六九)	142

第4章

文明化と独立——福沢諭吉とその時代

大久保健晴
中村敏子

はじめに	147
------	-----

福沢諭吉	(二八三五～一九〇一)	157
------	-------------	-----

- 一、武士として生きる——経験の蓄積 中津での生活／蘭学修業／江戸での開塾と欧米行き／武士からの転身
- 二、翻訳時代——西洋文明の紹介と実践 西洋文明と日本語／文明社会のシステム／『学問のすゝめ』——学問と独立
- 三、『文明論之概略』——文明史にもとづく社会構想 「万物の靈」と文明の発達／「文明の太平」

／文明史の原理と目的としての独立
四、国家統合と国会開設の問題 文明化を担う主体の問題／非合理的「情」と政争の制度化／『時事小言』と「明治一四年の政変」
五、『時事新報』の創刊とアジア論 朝鮮の文明化／清への評価／日本の立ち位置／脱亜論
六、『儒教主義』との闘いと男女関係の問題 一身の「徳」と「儒教主義」／条約改正と男女関係の問題
七、晩年——残された課題 日清戦争の勝利と人生の総括／「女大学評論」「新女大学」／「独立自尊」の人間

中江兆民（一八四七～一九〇一）

勝海舟（一八三三～九九）

榎本武揚（一八三六～一九〇八）

大久保利通（一八三〇～七八）

西郷隆盛（一八二八～七七）

中村正直（一八三二～九一）

加藤弘之（一八三六～一九一六）

植木枝盛（一八五七～九二）

大隈重信（一八三八～一九二二）

その他の人物

小野梓／緒方洪庵／大村益次郎／長与専斎／西周

224 220 218 214 209 207 204 202 199 194

第5章

日本の工業化と実業のリーダーたち ——日本資本主義（第二次世界大戦前）

武田晴人

はじめに

渋沢栄一（一八四〇～一九三二）

241

生い立ち／志をまげた士官と欧州歴訪／維新政府による制度設計／銀行経営に乗り出す／新事業の創設に腐心する／「合本」の理念を追いかける／朝鮮における渋沢栄一／実業界引退／民間外交を推進する／中国との関係改善と経済協力／養育院への支援／慈善事業への貢献／協同会の労働問題への取り組み／教育への貢献／民間外交の挫折／永眠

239

岩崎弥太郎（一八三四～八五）

益田孝（一八四八～一九三八）／中上川彦次郎（一八五四～一九〇一）

山辺丈夫（一八五二～一九二〇）／武藤山治（一八六七～一九三四）

野口遵（一八七三～一九四四）／鮎川義介（一八八〇～一九六七）

その他の人物

団琢磨／岩崎小弥太／鈴木馬左也／金子直吉／松方幸次郎／豊田佐吉／西川秋次／石原広一郎

286 283 280 277 272

大いに屈する人を恐れよ

石川健治

伊藤博文と憲法政治

はじめに

伊藤博文（一八四一―一九〇九）

- 一、草莽の志士として立つ 農民・林利助から卒族・伊藤利助へ／二人の恩師と王土王臣論／高杉晋作と志士の群像
- 二、「文明」との出会い 長州ファイブ／攘夷戦争と功山寺蜂起／明治維新と新政府への出仕
- 三、最初の「憲法」とその耐久性 御誓文と政体書／兵庫県知事への就任
- 四、「国是綱目」と反封建闘争 版籍奉還の提唱／「兵庫論」のハレーション
- 五、『ザ・フェデラリスト』の洗礼 築地梁山泊とアメリカ調査旅行／『ザ・フェデラリスト』との出会い
- 六、「岩倉使節団」から大阪会議へ 岩倉使節団と留守政府の衝突／立憲政体への道
- 七、憲法起草のアウトサイダーとして 機軸への顧慮なき憲法論議／未来の憲法の設計思想
- 八、三傑の死と明治一四年の政変 突然の世代交代／明治一四年の政変
- 九、欧州における憲法調査 良師を求めて／シュタインとの出会い
- 一〇、宮中改革と内閣制度 宮中と府中の分離／初代内閣総理大臣
- 一一、東洋に憲法ができる 憲法起草チームの結成／枢密院での憲法制定会議
- 一二、発布と施行のタイム・ラグ 国民国家から植民地帝国へ／「主権線」と「利益線」
- 一三、憲法政治と条約改正、あるいは日清戦争と三国干渉 総仕上げのほが／日清戦争と条約

311

295

改正／三国干渉・ナシヨナリズム・怨嗟の標的
 一四、それにもかかわらず、いなそれがあるために ハルビン／死に至る道程
 跋、伊藤が憲法をつくったのか、憲法が伊藤をつくったのか

近代日本のキリスト教知識人

赤江達也

内村鑑三の無教会主義と宗教的教養の時代

はじめに

内村鑑三（一八六一―一九三〇）

- 一、武士道とキリスト教 日本人であり、キリスト者であること／江戸・東京から札幌農学校へ／キリスト教への回心／アメリカ留学
- 二、不敬事件とその波紋 内村鑑三不敬事件／著述活動と思想形成
- 三、無教会キリスト教の形成 教団外の独立伝道者／紙上の教会——集会群を生成する読者共同体／キリスト教と教養主義の接続
- 四、「日本的キリスト教」の使命 キリスト再臨運動／第一次世界大戦とキリスト教ナシヨナリズムの再編
- 五、宗教的教養の時代 戦時下の無教会ネットワーク／宗教的教養の時代とその遺産

432

429

札幌バンドと無教会主義

新渡戸稲造（一八六二～一九三三）

南原繁（一八八九～一九七四）

矢内原忠雄（一八九三～一九六一）

その他の人物

植村正久／海老名弾正／新島襄／津田梅子／

岩下壮一／遠藤周作／金教臣／咸錫憲

460 458 456 454

第8章

京都帝国大学の東洋学——アジアの再発見

陶徳民
村田雄二郎

はじめに

内藤湖南（一八六六～一九三四）

470 469

一、京都帝国大学文科大学の設立 狩野直喜と内藤湖南／新聞記者から京都帝大教授へ

二、漢学者の家系と『近世文学史論』 漢学者の三代目／三宅雪嶺と内藤湖南／『近世文学史論』の射程

三、中国入学者との協働による東洋文化研究の開拓 中国訪問と満洲調査／時代区分論／章学誠の発見／敦煌文書による俗文学の研究／京都蘭亭会と『支那絵画史』

四、中国をめぐる欧米列強との対峙 オビニオンリーダーとして／「支那の国際管理」論の提唱／日露協約、日英同盟、日米衝突／満洲国成立と対満文化事業／五・一五事件と東方文化聯盟

矢野仁一（一八七二～一九七〇）

493

その他の人物

小川琢治／桑原隲蔵／富岡謙蔵／今西龍／鈴木虎雄／羽田亨／

武内義雄／石浜純太郎／宮崎市定／吉川幸次郎

495

第9章

未完の革命

——アジア最初の共和国・中華民国の誕生と模索

深町英夫

はじめに

孫文（一八六六～一九二五）

510 505

一、異端者 育ての親／悪友／助っ人

二、時の寵児 兄となる／さまざまな弟たち／つかの間の勝者

三、不屈の挑戦者 唯我独尊／自称・大元帥／教団の成立／未完の証し

段祺瑞 (一八六五～一九三六)
唐繼堯 (一八八三～一九二七)
宋教仁 (一八八二～一九一三)
陳炯明 (一八七八～一九三三)
胡漢民 (一八七九～一九三六)
宮崎寅藏 (一八七二～一九二二)

その他の人物

孫眉／何啓／陸皓東／謝纘泰／王和順／李福林／張永福／吳錦堂／馮自由／
戴季陶／馬超俊／陳炳生／彭湃／ジュームズ・カントリー／犬養毅／
北一輝／梅屋庄吉／マリアノ・ポンセ／ホーマー・リー／ミハイル・ポロジン

555 552 549 546 544 541 538

第10章

東南アジアにおける「千年王国運動」的民衆反乱の時代

伊東利勝／高城 玲
菊池陽子／今井昭夫
菅原由美／中野 聡

はじめに

567

サヤー・サン (一八七六～一九三一)

570

- 一、来歴 刀圭家／各地を遍歴／政治の世界へ／徴税実態調査
- 二、反乱 王を宣言／捲土重来／広がる反乱／不死身になる／生活基盤の崩壊
- 三、両頭制下の政治運動 ホーム・ルールと印細分離／政治参加の拡大／反政庁結社としてのウ
ンターヌ・アティン／農民による再活性化運動／分裂を繰り返すGCCBA
- 四、サヤー・サンの位相 ガロン・アティン／神将のご加護／現世中心のウェイザー信仰／「在来
民」の国家／似非僧侶の山師か英雄か

オン・マン (生没年不詳)

597

サーキアットゴーン (生没年不詳)

600

ドアン・ミン・フエン (一八〇七～五六)

602

スロンテイコ・サミン (一八五九～一九一四)

605

ペドロ・カローサ (?～一九六七)

609

その他の人物

612

チツ・フライン／ウー・オウツタマ／ソー・ティン／マウン・タン／
バンダカ・ヤテ／ヤーン・ピチエン／ブンマー／モーラム・ノイ・チャダー／
デイポヌゴロ／シ・シンガマンガラジャヤ二世／ソマライン／
シ・ジャガ・シマトウパン／アポリナリオ・デ・ラ・クルス／
フェリペ・サルバドール／バレンティン・デ・ロス・サントス

中東・イスラーム世界と帝国主義

——アフガーニーと抵抗のネットワークの形成

栗田禎子
岡崎弘樹

はじめに

627

ジヤマルルツデイーン・アフガーニー（一八三八／九～九七）……………629

「謎の前半生」が意味するもの／オスマン帝国改革運動（タンズイマート）の渦中で／エジプトでの活動——オラービー革命と「アフガーニー・ネットワーク」／エジプト占領後の活動——「固き絆」発行と反帝国主義ネットワーク／祖国への帰還とその頓末——専制批判から「タバコ・ポイコット運動」へ／「スルタンの賓客」としての幽閉と死／アフガーニーと世界現代史

ムハンマド・アブドウフ（一八四九～一九〇五）……………666

アフマド・オラービー（一八四一～一九一一）……………671

ヤークーブ・サンヌーウ（一八三九～一九二二）……………675

ムハンマド・アフマド（一八四四～八五）……………680

アデイーブ・イスハーク（一八五六～八四）……………684

アブドウツラフマーン・カワーキビー（一八五五～一九〇二）……………688

その他の人物……………692

ウイルフリッド・スカークウエン・ブランド／マルコム・ハーン／
アブダッラー・ナデイーム／柴四朗／レフ・トルストイ／幸徳秋水／
テオドール・ロートシュタイン／ドウゼムハンマド・アリー／チャールズ・クレーン

近代イランにおける文人政治家とその一族

——西と東と、王と民との狭間で

黒田 卓

はじめに

705

メヘデイーコリー・ハーン・ヘダーヤト（一八六四～一九五五）……………712

一、生い立ち 幼年時代とドイツ留学／ドイツ留学からの帰国／ガージャール宮廷への出仕／父との思い出／ナーセリー時代の終焉／新式学校建設運動／エルミエ校の経営／高等教育評議会メンバーとして／モザッファロツディーン・シャー第二次訪欧旅行への随行

二、日本への旅 アターバクとの親交と宰相辞任劇／メッカ旅行への出立／緊迫する極東／長崎から神戸へ／日本の古都にて／帝都滞在／東京での視察と見学／要人との面会／公使と政商／日本滞在の意味

三、立憲革命の渦中にて 帰国の旅路／革命の胎動／議会開設と憲法基本法制定／マシユルテ（立憲制）かマシユルエ（シャリア適法）か／立憲制の理解をめぐって／秩序と建設／司法改革への思い／アゼルバイジャン州総知事への着任

四、革命の果てに パリにて／革命の終幕とその後

レザークォリー・ハーン・ヘダーヤト（一八〇〇～七二）……………779
アリーコーリー・ハーン・モフベロツドウレ（一八二九～九七）……………784
モルタザークォリー（一八五六～一九二二）／ホセイインコーリー（一八四八～一九二六）／
モハンマドコーリー（一八六五～一九五〇）……………788

第13章

トルコ革命——オスマン帝国からトルコ共和国へ

粕谷 元

はじめに……………797

ムスタファア・ケマル・アタテュルク（一八八〇／八一～一九三八）……………800

- 一、前半生
- 二、独立戦争の開始
- 三、独立戦争の勝利
- 四、トルコ革命（一）トルコ化／（二）世俗化／世俗化とイスラーム化の相克
- 五、ムスタファア・ケマル・アタテュルクをどう評価するか
- 六、今なお不滅の国父

ズイヤー・ギョカルプ（一八七六～一九二四）……………826
アブドウツラー・ジェヴデト（一八六九～一九三二）……………831
メフメト・アーキフ・エルソイ（一八七三～一九三六）……………838
キヤーズム・カラベキル（一八八二～一九四八）……………845

その他の人物……………851

セイイド・ベイ／アフマド・シヤリーフ・アッサヌスイー／サイード・ヌルスィー／
イスメト・イノニユ／アリ・フェトヒ・オクヤル／アリ・ファト・ジェベソイ／
ヒュセイン・ラウフ・オルバイ／ハリデ・エディプ・アドウヴァル……………

第14章

二〇世紀初めの中央アジア ——革命の世代の群像

小松久男

はじめに……………865

ムナツヴァル・カリ（一八七八～一九三二）……………

フイトラト（一八八六～一九三八）……………

ファイズツラ・ホジャエフ（二八九六〜一九三八）／
チヨカエフ（二八九〇〜一九四二）／ヴァリドフ（二八九〇〜一九七〇）／
ルスクロフ（二八九四〜一九三八）

868

- 一、新方式学校 ムナツヴァル・カリ——ジャディード運動の総帥／新聞の創刊／自治構想と演劇／フィトラトとファイズツラ・ホジャエフ——青年ブハラ人
- 二、革命の激動 チヨカエフ、ヴァリドフ、ルスクロフ——一九一六年蜂起と三人の青年／ロシア二月革命／ロシア十月革命とトルキスタン自治政府／流浪の政治活動——チヨカエフ、コーカンドからパリへ／青年ブハラ人の蹉跌
- 三、東方の革命 ムスリム・コムニスト／東方の革命——ルスクロフの闘い／バクー東方諸民族大会／ブハラ革命——最後の結集点
- 四、中央アジアの内と外——主人公たちのその後 ムナツヴァル・カリ——最後の闘争／ファイズツラ・ホジャエフ——ウズベキスタンの創設／フィトラト——ウズベク・アイデンティティの形成／ルスクロフ——中央アジアの革命史を遺す／ヴァリドフ——イスタンブル大学教授／チヨカエフ——『若きトルキスタン』と独ソ戦／チヨカエフの後継者

その他の人物

924

イスハクハン・トラ・イブラト／アブドゥウツラ・アウラーニー／
ウバイドゥツラ・ホジャエフ／タシユプラトベク・ナルブタベコフ／
アブドゥウツラ・カーデイリー／ハムザ・ハキムザーデ・ニヤズイー／
オスマン・ホジャ・プラトホジャエフ／チョルパン／サドリッディン・アイニー／
サイド・ナーシルハン・トラ／アーリム・ハン／シエル・ムハンマド・ベク／
マダーミン・ベク／アブドゥルハミド・アリフオフ／ムーサー・ビギエフ／
フアーティフ・ケリミー／ユスフ・アクチュラ／ミルサイト・スルタンガリエフ／
アリハン・ボケイハノフ／ムハメドジャン・トウヌシユバエフ／
アフメト・バイトウルスノフ／ミルジャクプ・ドウラトフ／
メフメトエミン・レスールザーデ

執筆者一覧

写真提供・図版出典